

氏名	クム	ソ	ニ	琴	仙	姫
学位の種類	博士（美術）					
学位記番号	博美第316号					
学位授与年月日	平成23年3月25日					
学位論文等題目	〈作品〉bloodsea 〈論文〉ケモノ道一分断の狭間、動植物たちの栄える場所ー					
論文等審査委員						
（主査）	東京芸術大学	教授	（美術学部）	木	幡	和枝
（論文第1副査）	〃	准教授	（音楽学部）	毛	利	嘉孝
（作品第1副査）	〃	教授	（映像研究科）	桂		英史
（副査）	〃	教授	（美術学部）	た	ほ	りつこ
（副査）	〃	教授	（ 〃 ）	高	山	登
（副査）	（株）プロセスアート	代表取締役		中	谷	芙二子
（副査）	立命館大学	教授		池	内	靖子

（論文内容の要旨）

朝鮮半島を南北に分ける軍事境界線がある。言葉では軍事境界線と記されているが、長さは248kmにもおよび、その幅は4kmにもわたる。その両縁には、境界線を挟み対峙する兵士たちが常に「敵」からの侵攻を監視しており、1953年の分断以降、幾度も小規模の戦闘が繰り返されてきた。分断から60年の月日が過ぎようとしている今日、この境界線、非武装地帯では数多くの埋められた地雷が待機しているにもかかわらず、動植物たちが生き茂り繁殖する朝鮮半島で最も自然が栄える場所となった。

「動物達は地雷を踏んだりして傷つくことはないのだろうか」と心配するかもしれないが、軍事境界線の動植物研究者によると、動物たちは軍事境界線で彼らの本能を頼りに地雷の存在にもかかわらず繁栄しているという。ここには、動物たちが作った獣道がある。何度も通ったため自然に出来た動物たちの道。その獣道を辿れば、人も安全に境界線の中を歩いて行けるだろうと研究者は推測する。

かつてその場所には街があり、人々が住み、朝鮮戦争の間には何度も北と南の勢力前線が上下した激戦区。

この獣道を挟み、今の朝鮮半島は北と南の国家に別れて存在する。政府が外交的に承認するある一部の例外を除いて「北」に住んでいる人々は「南」の地を踏むことが許されず、「南」に住んでいる人々は「北」の地を踏むことを許されない。

それと類似するかたちで朝鮮半島には、人々が入り込むことができない精神の領域が存在している。軍事境界線と同じく、〈沈黙の領域〉に踏み込むことは「死」を意味している。

「北」ではあることを言うことが禁じられている。

「南」ではあることを言うことが禁じられている。

軍事境界線を自由に通ることは境界線がなくなるということ、北と南の国家の「死」を意味する。同じようにその〈沈黙の領域〉を話すこと、明らかにすることは、国家存続の危機を意味する。

国家はそこに立ち入ろうとする者、沈黙を破るものに「死」を強要する。そのため人々は、その殺された人々の通った道を避けて通ること、すなわち〈沈黙の領域〉を守ることによって生きる道を選ぶ。殺す側の道を行くしか生きるすべがなかった人たちもいた。その人々が自分の道を否定することは死を見つめることにつながり、その道が死につながっているという恐怖により、多くは肉体的な死が訪れるまでその沈黙を守る。朝鮮半島の人々にとって境界線のあちら側は「死」を意味している。

精神的な「死」はそのことで、肉体が先に衰えて行くよりも先に精神を殺すことで肉体を生かし続けようとする。しかし、人が生き続けている限り溶けることがない感情は、すべて消えることなく無意識の領域へ押し込まれる。

境界線で動植物たちが栄えているようにその〈沈黙の領域〉、無意識の領域では無数の生命、今は亡くなった生命たちが「ファンタズム」として現れる。国家が、組織が、ある「死」を無効にしようと試みる時、人々の無意識の世界に分裂が起きる。

本論文では、朝鮮戦争後の1953年から今日まで軍事境界線を挟み二つの国家として分離、変遷をしてきた北と南の朝鮮半島を、精神分析、宗教との関わりの点から紐解いていく。

【博士審査展作品説明】

《bloodsea》

この展示作品は人々の無意識の空間に潜在する女性の原型を捜し求めていく。その空間とは、意識の世界で人々が発することができない、言葉が規定されている「沈黙の領域」。禁じられた言葉は死体の破片の瓦礫と化す。肉片のかけらたちは死んでいった女性の原型となり無意識の領域にのみ姿を現わす。そこは夢の領域である。夢の世界は惑星の核から沸き起こる地球的な私たちの本性と疎通する通路を与えてくれる。

私はアメリカに住んでいたとき、韓国系教会を訪れる機会があった。人々が集団になって賛美歌を陶醉して歌う様子を目にした。その時の経験は幼い頃朝鮮学校で指導者を讃える思想的な歌を歌った頃の経験を彷彿とさせた。当時、私の国籍は日本で生まれながらも「朝鮮」と記されてあった。初めての韓国訪問は2005年。その最初の訪問で見た、ソウルの街に無数に輝く十字架の赤い灯りは私の目を眩ませた。脳裏では、韓国のキリスト教への狂信が北朝鮮の指導者への熱狂へと繋がっていった。その結びつきは朝鮮半島で過去何十年もの間に産出された、数えきれない「死」と複雑な関係があった。

ある夜、私は夢を見た。その夢のなかで私は、ソウルの街の小さな家々が立ち並ぶ丘の上の夜空を、塩をまきながら飛んでいた。塩をまくごとに体がふわふわ浮いていった。その下でたくさんの赤い十字架が光っていた。

メディア：インスタレーション

素材：映像、塩、LEDライト、金属の機械

上映時間：10分

パフォーマンス：天井から吊るされている機械から
塩が降る。
床に落ちた塩をはしごを昇り
再び機械の中に注ぎ入れ
塩を降らせるという行為を繰り返した。

ロケーション撮影：[川辺のシーン] 中国と朝鮮半島の国境に流れる川辺
[水中のシーン] フィリピン、カミギン島
[十字架の夜景] 韓国、ソウル

(博士論文審査結果の要旨)

「ケモノ道：分断の狭間、動植物たちの栄える場所」と題された本論文は、朝鮮半島の南北分断を主たるテーマに、日本の植民地主義、朝鮮戦争、暴力と記憶、身体と言語、生と死、国家、宗教、家族といった問題が複雑に絡まりあいながら〈境界〉を引き、〈分断〉を強いていくありさまを批判的に論じたものである。

論文全体は三部構成からなり、それぞれ第一章「沈黙の領域 Realm of Science」、第二章「異国の神 Foreign God」、第三章「コーサル・ボディ Causal Body」という章題が付けられている。とはいえ、議論はリニアに進められるのではなく、いわば螺旋状に上述の問題が絡み合わされることによって、無意識の中に閉じ込められている〈分断〉がもたらす沈黙に何とかして光をあてるという構造になっている。

論文を通読した上でなによりも印象に残るのは、学術論文としては破格の文体が生み出しているその圧倒的な迫力である。論文は、論述的なパート以外に、申請者自身の作品図版や詩、日記、戦場から自分にあてられた友人の手紙、小説、歴史的論考、哲学書の断片が注意深く配置されている。とりわけ、ヴァルター・ベンヤミンのメシア的歴史観、フロイトの精神分析、デリダの動物論などは、本論文の理論的通奏低音をなし、黄哲暎や金石範の小説は、彼女自身の詩作や作品図版とともに、戦争のもたらす暴力と記憶を解き明かすひとつの〈手がかり〉となっている。

しかし、ここで申請者は、理論を用いて作品を分析するという作業を試みているわけではない。むしろ、複数の声を大胆に配置することを通じて、その奥底に聞こえる声にならない声、人間と動物に分断されたその狭間にかすかに聞こえる声をなんとか拾い上げようとしているのだ。

その野心的な試みは、美術作家による一論考という枠組みを越えて、それ自身一つの自律した作品として読むことができる。作品制作を行う作家の博士論文の形式の先駆的なあり方の一つの提案として高く評価したい。

こうした論文の全体的な評価に加えて、内容については次の二つの点で評価したい。

ひとつは、朝鮮半島の政治的・文化的現状について、韓国研究の一人者であるブルース・カミングスや金東椿などの歴史研究や、韓国や在日韓国／朝鮮人の小説や議論を踏まえた上で、いまなお続く半島の分断の現状と、分断がもたらす精神病理的ともいえる問題に光をあて、その本質的な問題を明らかにしたことである。

さらに彼女自身が、実際に見たり経験したりしたこと、人から聞いた話など個人的な体験が、こうした分析を側面から支えている。東西冷戦が終わったとされる2010年に〈分断〉の間を生きるということがどういうことなのかを物語る資料としてきわめて重要な論考と考えることができるだろう。

本学教員とともに論文審査を担当した立命館大学の池内靖子教授は、この論文を「分断を継続させる暴力と暴力の記憶、沈黙の領域を深く掘り下げた」重要な論考とした上で、「分断状況の現在を生きるこ

との意味を思考する琴の言葉は、一つ一つ圧巻である」と高く評価したコメントを寄せている。

第二に、現実起こった歴史や集団的な記憶、そして個人の身体に刻まれた経験をいかに言語化し、あるいはいかに作品化していくかというその過程を描いた論考として高く評価することができる。

しばしば表現は個人的な営為として捉えられがちだが、ここで申請者が記述しようとしているのは、個人の力を越えた歴史、国家、民族が生み出す集団的な記憶であり、そのがんじがらめの関係性の中で、葛藤する個人の思考や想像力、夢や身体表現である。本論文は、そうした創造の試みの作業過程の貴重な記録として読むことができるだろう。

以上のとおり、琴仙姫の博士申請論文「ケモノ道：分断の狭間、動植物たちの栄える場所」は、博士学位授与に相応しい論文として評価することができる。本論文が、制作活動を中心とする学生の博士論文の形式のあり方に一石を投じるものになることを望みつつ、〈境界〉を越えた申請者の今後の活躍に大いに期待したい。

(作品審査結果の要旨)

本作は作者自らのディアスポラをめぐるモノローグ的なインスタレーション作品である。モノローグ的な性格を持ちながらも、この主題の設定には論文でも示されているように、作者本人が抱える国民国家観やPC(Political Correctness)に対する客観的な問題設定が介在している。その問題設定は東アジア、とりわけ二十世紀の朝鮮半島における政治的な背景が、宗教や政治的イデオロギーが精神に介入し、さらに領土に血肉化された個の身体性に及ぶという切実なテーマに及んでいる。ここでの表現の衝動は、当初からインスタレーションや映像という形式においてのみ還元されるわけではなく、塩という物質を介在させながら領土を構成する圧倒的に支配するイデオロギーや宗教およびそれに付随するイメージを形成しようとしている。その表現の地平には、これまで朝鮮半島においてさまざまな「個」(国民あるいは市民あるいはその総体としての国家)が直面してきた一連の切実さが、自らのパフォーマンスとともに寓喩となって立ち現れる。

こうしたディアスポラの拡大された寓喩はおのずからその問題設定を歴史的かつ社会的に置き換えているだけでなく、表現の視座の拡張につながっている。このように東アジア的ディアスポラを複合的に捉え直し、自らのパフォーマンスを軸に映像、音響、装置といった構成要素を介入させようとしている点はきわめて挑戦的である。作者はここで映像をもちいたインスタレーションという空間表現に複合させることによって、その問題設定の切実さを私的かつ詩的に試みている。その結果、これまで「在日」や「差別」などといった断片的かつエピソードとして表現されることの多かった東アジアにおけるPC(Political Correctness)の文化的事蹟を総体的に精算し、新しい抽象を見出すことに成功している。

一方でそのアプローチは両刃の剣であるとも言える。自らのパフォーマンスが確かな表象としての水脈となって寓喩の始原となっているものの、その水脈はあくまでインスタレーションという形式の中で生き生きとしたものになっていなければならない。その生き生きとした胎動を洗練された映像や音響あるいは装置のさらなる企てがあれば、領土や国民国家といった近代的な債権を些少なものにするような観念が立ち上がったはずである。その観念こそが共同体や国民国家を想像させる「イメージ」である。その点で「イメージ」を構成する映像、音響、装置といった基本的な構成要素についての手練手管はまだ充分とは言えない。これはどんな東アジアの作家にとっても困難な問題である。ただこの困難な「イメージ」を深化させる、今後の取り組みに是非とも期待したい。作者は東アジア、とりわけ中国における現代美術が暴力的なまでに商品価値を高めることによってのみ市場化されている状況にあって、これまで入手しうる限りの資料を丹念にたどることによって、政治と芸術の接点での繊細で重要な活動をここまで相対化し抽象表現として昇華させようとしてきた。このアプローチは、たとえ作者の国家観や近

代史観を受容できない人々にとっても刮目せずにはいられないだろう。

したがって本作品の作者を博士（美術）の学位を受けるに十分な資格を有する者と認定する。

（総合審査結果の要旨）

琴仙姫（クム ソニ）の博士学位論文「ケモノ道：分断の狭間、動植物たちの栄える場所」は学術論文であり、同時に、語の厳密な意味において、著者と朝鮮民族の命の文学であり、絶望と夢の身体譜である。本職はその重大性に鑑み異例に多方面に渡る専門的指導者を擁した審査会を形成した。研究動機のかな部分が大たとえば日朝史、社会学、精神分析といった既成の一学術分野の知見から派生しているのではなく、まず、1980年代生まれの在日朝鮮人という著者自身の歴史、身体、意識、精神にある。この点が大論文を異例のパラダイムに位置づけ、またその果敢な挑戦に期待を募らせる。

琴は、自身の経験と類似した他者、先達の言葉と葛藤を拾い、それらに揺さぶられ、破壊と再生の過程をへて、ある意味では後成的（エピジェネティック）に論文の学術的な枠組みと構成要素とを形作っていった。テーマは朝鮮半島の南北分断を主たるテーマに、日本の植民地主義、朝鮮戦争、暴力と記憶、身体と言語、生と死、国家、宗教、家族といった問題が複雑に絡まりあいながら〈境界〉を引き、〈分断〉を強いていくありさまを批判的に論じたものである。これはとりもなおさず、著者自身の苦悩と成長の過程を表象してもいる。したがって、そこには現実と幻想、意識と無意識、集団（民族）と個人の置換と相克が渦巻いている。

琴はこの渦中において、理論に現実と幻想とを分類し配置するのではなく、それらの諸要素にオーケストレーションを加えた構成を編み出し、ときに独奏、ときにコロスの響きを奏でさせて、螺旋状の思考と認識経験を読む者に喚起する。先行研究、検討事例、理論分析の面では、朝鮮半島の政治的・文化的現状について、韓国研究の一人者であるブルース・カミングスや金東椿などの歴史研究をはじめ、韓国や在日韓国／朝鮮人の小説や議論、フロイトをはじめとする精神分析の知見と広く目配りをし、朝鮮半島の分断の現状と、分断がもたらす精神病理的ともいえる問題に光をあてて、その本質的な問題を主体と客体の双方の視点から明らかにした。

構成と具体性において色濃い文学性をもち、論文の参照枠の広さ、多様性、実証性において学術論文の要件を満たしている本論文を、美術分野の博士学位論文に相応しいものであり、また、そこに新たな可能性を開拓するものとして高く評価し、合格とした。

作品 Bloodsea

琴は日本において一般大学を終えた後にカルフォルニアでの修士課程で映像制作を学び、本学後期博士課程と留学先のソウル大学において理論研究とともに映像、パフォーマンスを含む創造的な表現への研鑽をさらに深めた。本作品は著者が初めて祖国で暮らし、祖国の言葉を日常的に話し、祖国の歴史と現状に囲まれた2年間において主に構想・制作された。映像、言葉、インスタレーションとパフォーマンスを一人で制作、実施した。生々しい南北国境地帯での脱北者の死と再生、キリスト教伝道の象徴である十字架というアイコンが示唆する魂の惑いと支配、喪の行為と心情、魂の浄化、、といった主題は、朝鮮半島に限らず現代世界の多くの民族や個人に共振を起こす普遍性をはらんでいる。

以上を総合的に考慮し、論文、作品ともに博士学位に相応しいものと評価し、合格とした。